

第2回 射水市小杉駅周辺地区まちづくり基本構想策定協議会 会議録

- 1 開催日時：令和2年10月26日（月）午後1時30分～3時15分
- 2 開催場所：救急薬品交流プラザ 1階 ふれあいホール
- 3 出席者：

	氏名	組織・団体名	区分
会長	大西 宏治	富山大学 人文学部 教授	学識経験者
副会長	炭谷 靖子	富山福祉短期大学 学長	
	榊原 一紀	富山県立大学 工学部 准教授	
委員	籠浦 克幸	あいの風とやま鉄道株式会社 総務企画部長	公共交通事業者
	上野 裕之	有限会社小杉タクシー 代表取締役	
	瀬木 昭博	小杉まちづくり協議会	関係団体の代表者
	永森 豊	小杉まちづくり協議会	
	高田 忠直	小杉まちづくり協議会	
	(欠席)鳥内 雄輔	射水市商工会	
	三浦 美樹	射水青年会議所	
	伊勢 達哉	宅地建物取引業協会高岡支部 副支部長	
	坂井 禎	高岡土木センター 所長	関係行政機関の職員
事務局	島木 康太	企画管理部長	市の職員
	一松 教進	財務管理部長	
	板山 浩一	市民生活部長	
	小見 光子	福祉保健部長	
	谷口 正浩	産業経済部長	
	島崎 真治	都市整備部長	
	前川 信彦	上下水道部長	
	原 宗之	教育委員会事務局長	
	木田 徹	消防長	
	小塚 悟	企画管理部政策統括監兼企画管理部次長	
	盛光 寛人	政策推進課長	
担当課	佐藤 昌宏	政策推進課 主幹	
	篠原 智成	政策推進課 主査	
	樫葉 友一	政策推進課 主事	

4 議題

(1) 小杉駅周辺地区の課題及びまちづくり方針案について

●事務局から資料1について説明

○高等教育機関WEBアンケートの結果、小杉駅周辺地区まちづくりワークショップの結果について

委員：小杉地区は学生が多いまちだと感じている。今回の学生アンケートの意見については興味深く受け取った。また、住民ワークショップの参加者からは、意見を出し合う機会があって良かったという感想を聞いている。参考になる意見が多く出されているので、今後もワークショップのような取組を継続し行っていくことが大事であると思う。

会長：ワークショップについては、回数を重ねることによって色々な意見が出てくる。地区を分けて、時期をずらして開催していくことでより面白い結果も期待されるため、この事業に関わらずワークショップを様々な地区で実施すれば良い。

委員：まちづくり協議会のイベント活動において地域の学生に協力をいただいている。普段学生から聞いている意見と、今回のアンケート結果は非常に似通っているため、整理できて良かった。また、学生の地域イベントへの参加促進のため、学生が地域活動へ参加することで、学校での単位が取得できるような仕組みを継続していただきたい。

また、地域ではワークショップはこれまで何度も実施しており、その都度、問題点・課題、意見等を出しているが、毎回、ほぼ同じ意見である。その課題や意見等についてどのように対応していくのか、次のステップへ進めていくことが大事である。そのため、将来に向けた長期的なことはもちろん重要だが、直近の課題への対策も重要であり、短期的なものはいつまでに実施するというような目標を明確にしていかないと、総論だけで終わってしまう。

会長：ワークショップで出てきた課題については、出しっぱなしにするのではなく、出された課題を有効に機能させ、新たな取組につなげられないかという意見をいただいた。例えばSDGsもそうであるが、課題とその課題をいつまでに達成するか決定し、それに向かってボトムアップを図っていく。それらを行政と地域が連携して、ワークショップ等ですり合わせて行くのが望ましいかたちだと思われる。

また、地域活動に参加することで大学での単位が取得できる仕組み等について、各校ではどのように取り組まれているのか。

副会長：富山県立大学では2014年、2015年に知の拠点の取組の一環として、大学と地域が協働で地域の活動に取り組む場合に、5人～10人程度のゼミでの取組に対し単位が取得できるようにし、現在も継続している。また、地域協働支援室を設置し、コーディネーターを置いて地域協働授業や学生の主体的な活動をサポートするとともに、行政や地域団体の調整窓口として活動等を行っている。

会長：COC を採択された後、県立大学では地域と関わる取組がなされているので、その取組について、地域に対してよりわかりやすいかたちで示せるとよいと思う。

副会長：富山福祉短期大学では短大という特性からカリキュラムが過密であり、専門色が強いいため、地域課題解決等へ取り組む余裕がないのが現実である。こうした中でも、本学では「地域づくりかえ学」や、学生が自ら地域に出向く「富山コミュニティ論」などを通して課題解決力を育むという活動を全学的に取り組んでいる。また、地域との連携を推進する窓口として共創福祉センターを設立し、公開講義の実施や地域から持ち込まれた課題について、本学の教員の知識・技術を活用し、地域課題解決と一緒に考える活動等を行っている。また地学一体による地域課題解決拠点としてU S P（浦山ソーシャルプラットフォーム）を整備し、会議や研修、講演会、発表会など、地域に開かれたコミュニティスペースとして活用している。

会長：両大学とも様々なメニューを用意していて地域と関わりたいという意向はあるが、それが目に見えにくい状況にある。その背景には、住民が学生に期待するものと学生が住民に期待するものにやや齟齬があるのだと思われる。

また、私が富山大学でまちづくりに関わる授業をやっていて感じるのは、授業でまちづくりに関わるよりも、学生が主体となったサークル活動で関わる方が効果が高いと感じている。

委員：住民ワークショップの参加者についてはどのような世代構成だったのか。また、世代間での意見等の違いなど特徴的なものはあったか。

事務局：町内会長などの地域の代表者の方に加え、三ヶ地区、戸破地区それぞれにおいて子育て世代の方5～6名ずつ参加をいただいた。子育て世代の方からは、冬場の駅の装飾にあるムズムズくんの通年設置を希望するなどの子どもの目線の意見や、子育て世代のための場の整備などに期待する意見があった。

委員：アンケートにおいて小杉駅周辺地区のまちづくりで重要な取組として商店街の活性化が最も多く挙げられているが、現在、商店街のネットワークを再構築しようという動きがある。この中で、一番問題なのが空き店舗の存在である。今後どう活用していけるのか可能性等を探るために空き店舗に対し、今後の活用意向等についてヒアリングすることを検討している。情報を収集整理し、何か動き等があったときにすぐに活用できるようにするためである。今回のアンケート結果では、空き店舗の活用とか、チャレンジショップとか、学生のニーズが見て取れたので、わたくしどもが考えている方向性について後押ししてもらったと感じている。

また、駅周辺地区のまちづくりワークショップでは、賑わいの形成のところで、既存の商店に関してあまり言及されなかったことから少し寂しい感じを受けた。今後、既存商店街をどうやってリニューアルしていくかを検討しながら、新しく入ってきた人たちも含めて商店のネットワークを構築し、一緒に楽しめれば良いと思っている。

○小杉駅周辺地区の課題及びまちづくり方針案について

委員：提示された5つのまちづくり方針案について、基本的に賛成である。

伊勢領地域で地域を盛り上げようと始めたみこし祭りが、参加者が増加し、エリアも拡大している。そのエリアの拡大の際に、強い抵抗感を感じたのは下条川を越えるとき、さらに鉄道を越えるときであった。また、子どもみこし祭りを十社の宮の春の例大祭に合わせて実施しており、総勢約200人でまちを廻る。その時に、参加する子どもたちが言ってくれたのは「格好いいね」「10年後もつづけてね」という言葉である。20年後にこのまちに住みたいという人を今つくっておかないと、自分たちが高齢化したらお終いになる。そんな危機感を持ちつつ、20年先を考えて活動している。このまちに住んでいる人が本当にこのまちに人を呼び込みたい、人を増やしたいということを標榜してやっていけない限り上手くいかない。その意味で方針の一つに記載されている学生が関わるまちづくりという視点は良いと思っている。学生に祭りを見学に来てもらいSNSで発信してもらうなど、何か軸になるようなものがあれば呼び込めるだろうと思っている。この地域は、生産年齢人口や年少人口がまだ増えているので、今がチャンスで、40代ぐらいの世代が元気にやらなければならない。

方針の2番目「安全・快適で住み続けたい市街地環境の整備」という観点からは、まだ生まれていない、まだ結婚していない、まだ住んでいない人たちに住んでもらうようなまちづくりをする必要がある。そして、ターゲットをそこに置いた上で、商店街がどうあるべきかということを考えられる受け皿を作り、一步步進めていくことが大事だと思っている。方針4の「歴史・文化・自然を継承するまち・ひとづくり」については、地元の歴史文化を知らない人も多いので、歴史を知っている人がいるうちに歴史を発掘し整理することも大事であり、伝統を守っていくためには挑戦することも必要であると思っている。既存住民と新しい住民が伝統と挑戦をする姿を学生や子どもたちに見てもらって、ここに住みたいと思ってもらえれば空き家の解消にもつながっていくと思っている。

また、将来像の基本コンセプトとしてはこれで良いが、将来像に向けた方針に「未来の人口」をターゲットに加えれば、一つ積み上がって面白い地域になると思うため検討をお願いしたい。

会長：いろいろご意見いただいた。まず、方針は基本的に賛成であり、それを誰がやるかということと住民がやるということである。まず、住民がまちづくりを行うという意識付けが将来像やまちづくりの方針の中に盛り込まれているのか。という点について検討が必要である。次に、5つの方針はこれで行くとして、示し方を工夫できるところはある。まちづくりのターゲットは何か。（ターゲットがあるほうがわかりやすいのか。）まちづくりの具体的な中身等、住民へ説明する際、これはあなた方がやるのですということをうまく説明できるような示し方の検討が必要である。

委員：学生アンケートの話に戻るが、小杉駅の利用状況において、通学の頻度は何十年も変わらない。その中で一つ光明を感じたのは、通学以外の買物・訪問・娯楽等の目的で週に1～2日程度以上の頻度での利用者が概ね3割程度いることである。学生は通学で朝来て夕方に帰る。この流れを何とかできないか常々考えている。一つ残念なのは、歌の森のスターバックスが駅から離れていることである。これが駅周辺に立地していれば駅周辺の活性化に繋がったのではないかと思う。駅周辺には学生が集える場がないこと。学生に人気のあるスターバックスのような施設の立地を駅周辺に誘導していくことが大事であると考えている。

タクシーの利用者については、約3割は出張の方、約5割は通院・買物等の地域住民で、約1割が学生・先生、約1割が観光客という構成になっている。コロナ禍で例年より少ないが、この10月は現在まで6件観光案内をしている。観光案内のうち、小杉駅周辺を案内したのが2件、残り4件は新湊内川方面の案内であった。以前小杉駅には観光案内所があったが、今はない。今後、駅の改善を図る際には観光案内施設を設置されるのかどうかをお伺いしたい。ちなみに、石動駅が最近整備されたが、地元の同業者の話によれば、南北通路の往来だけしかなく、観光スポットが沢山ありながらタクシー利用が少ないとのことであった。小杉駅はこの二の舞にはしたくないと思っている。

また、12月18日にオープンするスーパーホテルと打ち合わせた際に、ホテルには飲食機能がないので、三ヶ・戸破地区の飲食店を紹介した。スーパーホテルには昼・夜の飲食ニーズがあり、サービスを提供する地元の飲食業の方々とこれから話し合う予定である。三ヶ・戸破地区の活性化に繋がることを期待している。

会長：事務局への質問だが、駅の整備をすることがあった場合に、観光案内所の導入を考えているかどうか、その点はいかがか。

事務局：観光案内機能の設置については、基本構想の中でも記載する。

会長：小杉駅は陸の玄関口として位置づけられてもいるため、観光資源の展示はあった方が良いと思う。スターバックスのような機能も駅周辺にあった方が良いと思うが、学生は経済的に余裕がないので、目の前にあるからといって、頻繁な利用は難しいと思われる。利用者の増加にはなかなかつながらないのではないかとと思う。

委員：小杉駅の橋上化については、地域の皆さんの思いは重々承知しているところであるが、現実には改札口が南北両方にあり、連絡地下道も設置され、古いながらも機能している状況である。これらのことから、他駅との比較においては機能的に不便とは言い難く、こうした観点から橋上化の必要性には疑問を抱かざるを得ないと思っている。鉄道施設の整備には多額の費用がかかるため、自治体の財政負担も非常に大きいものとなり、コロナ禍で収入が激減している中で、橋上駅舎を整備する経済的余裕はない状況である。単に施設を新しくするだけでは鉄道の利用者増には繋がらないため、費用対効果の点から橋上化のもたらす便益に疑問が残ることになる。橋上化以外の方法で、周辺地域の活性化を図る方策の検討を十

分行っていただきたい。その上でどうしても橋上化が必要だということになれば、付加する機能、ハード・ソフト両面で人が集まり交流するような機能を付加し、鉄道利用者が増えるような仕掛けが必要だと思う。小杉駅周辺地区の活性化や交流人口の増加に繋がって、さらには鉄道利用者の増加、利便性の向上が図れるような方策等を盛り込んだ構想にしていただければと思う。

会長：事業者としては駅の橋上化に関しては単純な話ではない。もし実施するとすれば、それを実施することによって地域にとってどんなメリットがあるか、付加できることがあるか等、いくつか検討して行かねばならないことがあるとのご指摘であった。

委員：駅舎の橋上化については、小杉まちづくり協議会でも話をしており、県からも多額の費用がかかるとも言われている。数年でできるようなことではないため、公共施設を移転し、駅舎と共存して整備するなど、検討やってしなければと思う。

戸破・三ケは約 14,000 人が居住し、転入者が多く、比較的若い世代が多い地域である。少子高齢化と言われるなかで、5 年後には、小杉、歌の森、作道の 3 つの小学校において児童数が増えると予測されている。このことから、若い人たちがこの地区に魅力を感じて住んでいるのではないかと考えている。そういった若い世代にもっと魅力を感じてもらえるものを提案していくことも大事だと思う。また、子どもたちに対し何ができるか考えると、保育園とか福祉の問題も出てくる。これらのことは、一体となってやるべきと考えている。また、この地域は若い人が集まってくる多様性を持った地区である。資料 20 ページの将来像の基本コンセプトについても、多様性を持った人たちが集い文化を育む、そういうエンタランスエリアであるという位置づけにした方が良いと思う。多様性を持った人たちが集まってきているエリアであるということ、また、その人たちのために何をするかということの基本コンセプトに盛り込むべきではないかと思う。

会長：20 ページの将来像は、地学連携がキーワードとしてあって、その連携から人が集い文化を育むということだが、それだけではなくて、この地域を選択して住んでいる人々、ずっと前から暮らしている人々など、多様な人たちが居ることによって、集い、文化が育まれてくる部分もある。それを言葉として盛り込めないかという難しい宿題をいただいた。事務局で何か考えていることがあればお知らせいただきたい。

事務局：コンセプトに掲げている地学連携には、直接的な記述はないが、多様な方々が集まるというイメージを持っている。将来像の中に言葉を盛り込むかどうかについて、事務局で検討したい。また、その他のご意見についても将来像に向けた方向性の中で落とし込んでいく必要があると思っている。そのあたりも含めて事務局の中で検討させていただきたい。

委員：地学連携を否定している訳ではなく、基本的な考え方として地域住民がこの地域について今後どう考えていくかということが大事だと思う。もう一つ付け加えると、戸破も三ケも同じだが、世帯数 3,600 のうち町内会に所属している世

帯が約7割で、残り約3割は集合住宅に居住している方々である。そして、集合住宅の方はいずれ住替え時には、付近に良いところがあればこの地域で住みたいと希望している方が多い。このようないろんな可能性を持った人たちを取り込んで一緒にまちをつくっていかうと思っている。

委員：駅の橋上化は目的ではなく手段としてとらえるべきで、綺麗な駅を目指すのではなく使って貰える駅を目指すべきと思っている。小杉まちづくり協議会で議論したことだが、手段としての橋上化の必要性について大きく3つ挙げられた。一つは北側市街地からアルプラザへのアクセス不便を改善するための自由通路の活用（直結による買物利便性向上）、二つ目は学生が勉強する場所の提供（富山市の塾へ通わなくて済むように、駅付近の空き店舗やアルプラザ内の空間の有効活用等）、三つ目は子どもの送迎に便利な駅付近への保育所・幼稚園の立地である。伊勢領でも最近集合住宅に多くの方が住んでいるが、土地が造成されると早く売れるような状況で、集合住宅の居住者の住替えによる定住化の事例が多く見られる。集合住宅居住者の住替え需要への対応も必要と考えられる。ビジネスの視点では富山・高岡に近いという地の利がある。このことについては、まちづくり方針2に仕事という視点を加えることも検討いただければと思う。また、この地域に外国人が多く居住しており、太閤山小学校のクラスには2～3人の外国人が当たり前のように在籍している現状である。多様性のある地域づくりもますます重要になると考えられる。

会長：駅の橋上化についてはどういう地域をつくりたいのかということが関わってくるため、橋上化ではない方向も検討可能である。今回の基本コンセプトや方向性に具体的に書くこととは別に、地域と具体化について話していく際に検討していくところだと思う。エントランスエリアの言葉の意味としては、集合住宅に暮らしている人たちがさらにこの地域でワンステップアップの住宅に住み替えることにつながっていくように、居住する時のエントランスとしてもとらえられると思う。住宅供給によって同じ世代が多く入ってくると、年齢構成が偏る。そこからどういう新しいまちづくりのかたちがあるか少し考えておく必要がある。それらの点についてまちづくりの方向性の中に、もう少し例示や文言で入るものがあれば加えるなど、事務局で検討してほしい。

委員：地学連携の中に地域住民が主体になってとありますが、地域住民が何か取り組みたいと思った場合に、どこへアイデアを持って相談に行けばよいのか。

事務局：市ではまちづくりセミナーの開催やNPO法人が行っているまちづくりネットワークの組織がある。そこでは、地域振興会の方々に参加いただき、市内のまちづくり関係の団体の紹介を行っている。そうした集まりを活用していただければと思う。

委員：地域住民が主体になるとか、連携することが大事だと思っており、自分たちのアイデアを受け止め相談していただける場があれば良いと思っている。そのため、まちづくりセミナーやネットワークなどの仕組みや組織があるということを地

域住民にもっとアナウンスしていただければありがたいと思う。

事務局：市広報などでPRしているが、なかなか伝わらない部分もあるため、もっと住民に分かりやすく発信しくことも検討していきたい。

会長：市として情報伝達手段を色々と工夫されていると思うが、逆に住民の方々から住民に伝わり易くする方法等についてのアイデアを出してもらうのも良いのではと思う。

副会長：こんなことをやりたいと思った時に気軽に相談に行って、担当窓口や制度等について紹介していただけるような、ワンストップで相談できる窓口があると良いと思う。

委員：先程お話された学校の窓口の活用等もあり得るか。

副会長：活用の可能性はあると思う。

委員：まちづくり方針案には賛同する。まず、資料 25 ページ（2-1）の空き地・空き家のリノベーションによる多様な活用はまさにその通りだと思う。空き家バンク制度は売りたい・貸したいの意志表示のあった物件が対象だが、所有者がいない意思表示のない空き家については情報がない。こうした空き家に対しては地元自治会を通じて調べるなどの工夫が必要と考える。空き家の活用は基本的には宅建業界と連携してリノベーションを進めることになると思うが、その進め方が大事で、地域に一定の重点的な網をかけて、地域・自治会、宅建業界、いろんな方を巻き込んで窓口を設置して進めることが重要と考える。

委員：まちづくり方針案には賛成である。その中でも、資料 19 ページの「知」の拠点とともに創る次世代のまちづくりについて、学生との連携という面では、射水青年会議所においても、高校生インスタ映えコンテストを行うなどの活動をしている。今後も学生とまちが一体化するように学生参画意識を高めるきっかけづくりができれば良いと思う。また、アンケート結果に戻るが、こういったような人たちが小杉駅を利用しているかについて、年齢階層別にニーズ等を探ったものはないか。

事務局：駅利用者の年齢構成までは把握していない。

委員：利用実態調査を毎年実施しているが、お尋ねの年齢階層別の利用状況についての調査は行っていないため、小杉駅における年齢階層別データをお示しすることはできない。

会長：年齢階層については使用用途まではわからなくても年齢階層別の利用実態であれば、一般的なNTTなどのビックデータで把握する方法がある。そして、どういう人たちが小杉駅を使っているか分かればもう少し違った意見が出てくる可能性がある。

委員：今回の基本構想において実現化方策まで検討されるのかお伺いしたいと思う。

事務局：基本構想として具体的などころまでは踏み込まないが、短期的なもの長期的なものといった整理は行いたいと考えている。

委員：今回まちづくり方針案まで整理されているが、この協議会においては、その先の

実現化方策まで検討するという認識でよいのか。

事務局：基本構想として、短期的視点、長期的視点というスケジュール感覚は持っているが、具体的なことをどこまで踏み込めるかは今後検討していきたい。

委員：これまでに実施されたアンケートやワークショップの結果等を見ると重複した意見も多々ある等、意見がほぼ出尽くした感があり、その意味で駅周辺の課題が相当絞り込まれてきたと思う。資料の 15～19 ページのそれぞれに、現況と課題が整理され、その下段に解決策とあるが、これはあくまでもワークショップ等において出された住民からの意見を整理したものだとすれば、解決策という文言を使用するのは適切ではないと考える。文言の記載の工夫をお願いしたい。また、資料 21 ページにまちづくりの将来像（基本コンセプト）について、将来像はこの地学連携だけで良いのかという疑問がある。まちづくりを進めるのは地域であることは間違いないが、当然予算が必要になるため、予算を地域にどういうバランスで配分するかが重要な観点であり、地学連携だけでは現実的に難しいと思う。響きの良い言葉ではあるが、より具体的に進めるにはもう少し工夫が必要だと思う。

次に、資料 22 ページから 5 つのまちづくり方針が掲げられ、それぞれの項目に具体例が示されているが、この中で、例えば 2－(2) 多様な世代に選ばれる安全・快適な住環境の整備の具体例として、エリアの再整備として土地区画整理事業、市街地再開発事業等が挙げられていますが、これは大きな都市計画事業であるため、これが地域においてどれだけ醸成されているのかという視点からまだまだ難しいだろうと思う。また、3－(2) 鉄道を横断する南北交通の強化の具体例として小杉駅の橋上化やペDESTリアンデッキの検討などが挙げられているが、実現には多大な時間、予算がかかるし、道路のアンダーパス、立体交差化については、物理的に実現性が難しいと考えられる。具体例として実現できないようなものを載せるのは誤解を生むなど適切でないため、少し精査をして実現可能性のフィルターをかけて出すべきである。

事務局：もともと地元の方の意見を踏まえて 20 年後 30 年後の夢のあるものを構想の中で描こうということで、まちづくりの各団体からご意見やご指摘をいただいて具体例として提示したものである。構想の中でどのようなかたちにしていくのか今後の検討になるが、短期的にすぐやらなければならないものや、長期的な視点をもって皆様の夢をそこに盛り込むこともあっても良いと考えている。そのあたりは事務局で整理させていただきたい。

会長：将来像の基本コンセプトの「地学連携」という文言について指摘があったが、これについて事務局から何かあるか。

事務局：「地学連携」については確かに少し強く出過ぎている感じはしている。いろいろとご意見いただいたので、総合的な視点で検討していきたい。

会長：皆様のご意見を踏まえると、5 つのまちづくり方針はこれで良い。そして将来像の基本コンセプトである「地学連携により人が集い文化を育むいみずのエント

ランスエリア」については方向性としては良いが、住民が中に入っていることが上手く言えるかどうかというところをもう一度事務局で検討いただけたらと思う。具体的には、21 ページの将来像に向けた方向性の中に皆様からご指摘いただいた点をうまく反映できる言葉を付け足すなど、事務局で文言について検討していただきたい。

(2) その他

会長：その他の議題について事務局から何かあるか。

事務局：今後の日程について説明する。本日皆様から頂戴したご意見を事務局で精査検討し、予定通り進めば、まちづくりの方針案として、皆様にご説明した後、市議会に説明することを予定している。また、来年の1月下旬に第3回小杉駅周辺地区まちづくり基本構想策定協議会を開催し、基本構想素案を提示する予定である。日程が決まり次第ご案内させていただく。

—了—